

レポーター：美術館の外に出てきましたけど、とっても大きなカボチャが外に置いてあるんですね。

学芸員：そうなんです。ここは福岡市美術館のエスプロナードっていう屋外の広場なんですけど、ここにはたくさん彫刻の作品が置いてあるんですが、その中でも一番人気のある作品の一つといってもいいかもしれません。

レポーター：すごい斬新な。

学芸員：そうですね。このカボチャの作者は草間彌生さんという今では国際的に活躍されているアーティストの方の作品ですね。

レポーター：草間彌生さんって一体どういった作品を作られている方なんですか。

学芸員：はい。あの草間彌生さんといえば、もうドット、水玉模様とあと網の目ですね。網目状のものを描いたペインティングだとか、あと立体作品、ソフトスカルプチャーっていう、柔らかい彫刻っていいですか、布、綿を入れた布なんかには、ペイントしてそれをオブジェにくっつけたような、そういう作品をたくさん作っている方ですね。で、このカボチャにも見て頂くと水玉がたくさん、埋め尽くされていますね。

レポーター：大中小と。こう。また遠くで見ると、近くで見ると模様の印象も変わってきますね。

学芸員：結構細かく、水玉模様が描かれています。

レポーター：この水玉模様とか、網目模様に草間さんがこう特化している理由とかがあってあるんですか。

学芸員：そうですね。草間さんは10歳の頃から幻覚に悩まされていて、幻覚というのが、例えばお花とか水玉とか網目とかそういう一つのイメージに覆い尽くされるような自分が、そういった幻覚に悩まされていたんですね。ですので、彼女は自分でそういったもの、その恐怖の不安の元凶みたいなものを描くことによって、不安から逃れようとしていて、それがずっと今でも、80歳をこえた今でもそういったイメージをずっと作り続けていらっしゃるんですよ。

レポーター：へえー。なんか恐怖から打ち勝つためにこういうオブジェを作られていて、だからこそ私たちのなんかエネルギーみたいなものを感じることができるんでしょうね。

学芸員：そうですね。

レポーター：なぜ、ここに草間彌生さんの作品が置いてあるんですか。

学芸員：はい。この作品はあの1994年に、草間さんが初めて屋外に置く彫刻作品というものに取り組んだんですけど、その第1号の作品なんですね。

レポーター：へえー。

学芸員：この94年という年に福岡の天神でミュージアムシティ・天神というアトイ

ベントが行われたんですが、この作品は福岡銀行、ありますよね天神に、そこの前に、あの突如このカボチャが出現してみなさんを驚かせたっていうエピソードがあります。

レポーター：そうなんですね。でもともと福岡銀行にあったものが、今現在どうしてこちらに展示をされているのでしょうか。

学芸員：そのときのインパクトが大きくて、あと人気もありましたので、翌年に福岡市美術館がこの作品を購入しました。

レポーター：へえー。そうなんですね。確かにですね、美術館から出てきて一番に目につくのがこの作品なんですけど、何かカボチャと意味っていうのがあるんですか。

学芸員：草間さんは、カボチャがとっても愛嬌がある形をしていて、あのエネルギーがあって、すごく大好きだとおっしゃってるんですけど、確かに見るとすごいパワーがありますよね。

レポーター：そうですね、元気をもらえるような色ですよね。

学芸員：この黄色と黒というのはまあ警告色と呼ばれていて、あの毒々しさもあるんですけど、それと同時に、なんか愛らしい感じもあって、その二つの要素が同居している、そういう感じがします。

レポーター：素材とか何で作られてるんですか。

学芸員：これは、FRP という繊維強化プラスチックという素材になります。

レポーター：プラスチックなんですね。

学芸員：非常に強い素材ですね。

レポーター：この作品を見る点で、何かこう面白いところとか、こういったところを注目してほしいところとあってあるんですか。

学芸員：そうですね、まあ、あのもう、素朴に楽しんで頂ければいいかなと思うんですけど、普通、カボチャがありえないこの美術館のこういう場所に、こういったものが出現している、その意外性なんかを楽しんで頂ければいいかなと思っています。あと、ぐるっと一周して回ってもいいですし。

レポーター：そうですね、いろんな角度からまた見るとまた違ったところも出てくるかもしれませんね。

学芸員：はい。

レポーター：わかりました。ありがとうございました。

学芸員：はい。